

「CORPORATE REPORT 2016」を読んで

2016年8月1日
神戸大学大学院
経営学研究科教授
國部 克彦



京阪グループのCSR

平成28年4月に持株会社体制に移行されたことから、CSRレポートと会社案内を一体化した、京阪グループとしての開示冊子となりました。本報告書では、グループの経営理念体系を整理して表示されたあと、運輸業、不動産業、流通業、レジャー・サービス業の4分野においてそれぞれがどのように具現化されているかが、わかりやすく説明されています。スペシャル対談にも書かれていますが、創業者である渋沢栄一翁は「社会のために」というCSR精神をもとに事業を立ち上げられており、京阪グループの事業の随所にその精神が見られます。「第2の創業」においても、その精神を受け継ぎ、さらに現代的なCSRの要素を取り入れて、「BIOSTYLE」等の新規事業の立ち上げにチャレンジされているところは、本業におけるCSR（企業が事業活動を通じて、社会に新しい価値をもたらしたり、社会の問題解決に貢献していくこと）の意義が十分に根付き、100年を超えてなお成長していることがうかがえます。これからの時代にもますます重要とされることですので、4つの事業分野における展開のさらなる充実を期待しています。

第1の創業は鉄道を中心にして発展され、沿線価値の向上という使命をもって、さまざまな事業を拡大されてきました。そこで培ったものを沿線外にも提供することで、さらに広いエリアでのCSRを実践していくことを志向されており、大阪・京都・滋賀の京阪電気鉄道から、日本の京阪グループへと、大きな転換を感じます。ぜひ「社会のために」京阪グループの持つ力をもって広い分野で社会に貢献していただきたいと思います。

CSR情報の指標化と評価

従来のCSRレポートをベースにしていますが、京阪電気鉄道の安全報告書が別冊になったこともあり、鉄道業以外についての情報量が増加しています。「環境」「社会」「ガバナンス」について、各事業分野での記事が集められており、また、「安全」も「社会」の一項目としてまとめられ、とても見やすくわかりやすくなりました。「環境」については、方針から年次目標・実績までが明記され、数値化された情報で進捗度を見ることができ、定量情報が充実しています。今後は、「社会」に関しても、定量情報と定性情報のバランスを取るとともに、目標を立て、PDCAサイクルを回るように工夫されれば、活動が充実すると思います。つまり、グループ共通の方針から目標、共通の指標があれば、経年変化やグループ各社の状況が見えやすくなります。

また、指標化だけでなく、自社の活動を評価する視点も必要です。活動の説明だけでなく、その成果を評価することで、次の活動の課題が見えてくると思います。多くの活動を説明されていますが、今年は特にどこに力点を置いたのかなど、プライオリティを意識した活動が、CSRの深化をもたらすと思います。